画面の外側

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
画面の外側

【Ｎコード】
Ｎ０６８９Ｐ

【作者名】
やしろ

【あらすじ】
私は今でも、彼女が笑うことしかしていないんじゃないかと、ときどき心配になる。

一番涙が集まる場所、それは葬式だと思っていた。
その人の死を嘆き、涙する。それが私の葬式に対するイメージだった。そして、そのイメージは大きく裏切られることになる。
「あ、いらっしゃい、よく来てくれたね！」
彼女の第一声は、あまりにもいつもどおりで、だからこそ私はひどく面喰った。

当時小学生だった私と彼女は、地域のソフトボールクラブに入ったことで知り合った。
私とはまるで正反対の彼女は人望と実力を兼ね備えた、部の中心人物だった。
いつだって笑顔。それが、彼女に対する、部の共通認識だった。
練習がどんなに厳しくても、試合の状況がどんなに絶望的でも。
私は、それが彼女の強さだととらえ、憧れていた。
今思えば、それはただ単に私の誤解にすぎなかったのかもしれない。
小さな子どもが、テレビのヒーローが画面の外側では私たちとなんら変わらない、生身の人間であるということを知らないように。

「葬式って、ほんとに嫌だよねー。うち、狭いのにさ、皆して来るもんだから、座る場所もないっていうか」
彼女はいつもどおりのペースで私に話しかけ、笑った。
今が葬式の参列中で、彼女の母親の写真が黒く縁取られた額の中に飾られていなければ、いつものおしゃべりと錯覚していたことだろう。
父親を早くに亡くし、きょうだいもいない彼女にとって、母親だけ

が唯一の家族だった。それを知っていただけに、その笑顔は予想外であり、暗い葬式のなかで輝く異物でもあった。
泣いていたり、何かに耐えるような顔をしている、葬式にふさわしい人たちのなかで、私は泣くことも忘れてただ困惑した。

ソフトボールの引退試合が、晴れた秋空の下で終わった。葬式の、1か月後のことだった。
生みの親がいなくなり、遠い親戚に引き取られることになっても、彼女は部活をやめることはしなかった。
休むこともほとんどなく、熱心に、そしていつも笑顔で。
試合が終わった余韻が残るなか、彼女に袖をひかれた。
「負けちゃったけど、楽しかったよね。ソフト」
彼女はそう言って、ふいに空を見上げた。
「ねぇ、お母さん、見ててくれたかな」
彼女が私たちの中で誰よりも傷ついてきて、それでも周りに絶対に悟らせようとしなかった強がりが、剥がれた瞬間だった。
彼女も、私と同じ小学生だ。あの葬式のなかで身を震わせていた大人の誰よりも、彼女が一番泣きたかっただろう。
それでも絶対に泣かなかったのは、笑顔で振舞ったのは、そうしていないとくじけてしまうのがわかっていたからだろう。
笑うことでしか自分を守れなかった。私が彼女の強さだと信じて疑わなかったものは、実は一番脆い部分の裏返しだったのだ。
私は何も言えずに、ただ、天まで遮るもののない青空を一緒に見上げた。
一瞬だけ盗み見た彼女の横顔には、透明な涙がつたっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0689p/

画面の外側

2010年11月22日20時03分発行